



二木 謙三 ふたき けんぞう

生まれた場所：秋田市
生まれた年：1873年
なくなった年：1966年

「ふたぎ」という読み方もありますが、謙三自身が「ふたき」と名のっていたこともあり
ここでは「ふたき」と表記します。

でんせんびょう 伝染病とたたかい続けた医師

ふたきけんぞう 二木謙三は、今から130年以上前の1873年、秋田市の医師の家に生まれました。小さいときは体の弱い子どもであったそうです。医師であるお父さんが「この子は20歳まで生きられるだろうか」と心配するほどでした。謙三は、弱い体ながらも、秋田中学校、山口高等学校をそつぎょうし、帝国大学医学部に進みました。

28歳のとき医学部をそつぎょうして、東京の駒込病院ではたらきはじめました。そのころは、世の中にこわい伝染病（人から人へうつる病気）がたくさんありました。駒込病院は、その伝染病を研究し、なおすための病院でした。この駒込病院で、謙三は伝染病にかんけいする、世界的な発見をいくつもしました。その発見のいくつかをしょうかいしましょう。

「コレラ」という伝染病があります。その当時、コレラ菌は、一種類のものなのか、それともいろいろな種類のコレラ菌があるのか、日本で意見が二つに分かれていました。謙三は、新しいけんさの方法を考え「いろいろな種類のコレラ菌がある」ということをしょうめいしたのです。

また「赤痢」という伝染病がありました。その病気の原因である赤痢菌も、さいしょは一種類しか見つかっていなかったのですが、謙三は新しい二つの赤痢菌を見つけました。そして、ほかにも多くの赤痢菌が見つかる、それらの菌をグループごとに分けて、整理したのでした。整理された表は、その後長い間、医学の世界で使われました。

ネズミにかまれると、そこから何かの菌が体に入り、なかなかおらないという伝染病がありました。謙三はそのことも研究して、菌の正体をつきとめたのでした。

このように謙三は、当時、とてもこわかった伝染病について、さまざまな発見をして多くの人の命をすくいました。また、多くの大学で伝染病について教え、研究者を育てました。

謙三が小さいときに体が弱い子だったというのは、さいしょに書きました。それをなおすため、謙三は、自分の食事を工夫し、玄米（米の表面の「ぬか」をとっていないお米のこと）を食べることで、健康になったそうです。謙三は医師の仕事をしながら、玄米食を人にすすめ、健康に生きるための食事や呼吸のしかたなどを教えました。

伝染病学会を作り、また東京大学の教授となり、伝染病の研究を通して、多くの人の命をすくった謙三は、秋田県人ではじめて文化勲章を受けました。「100歳まで生きて、玄米食が体にいいことをしめす」と話していた謙三ですが、93歳、家族や多くの弟子に見守られながら亡くなりました。この当時は、50歳ぐらいで亡くなる人が多かった時代ですから、とても長生きをしたことになります。謙三のおそうしきには、数千人の人が集まり、その死をおしみました。